

設楽発掘通信

No.79
令和5年
6月号

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査が始まりました

平年よりも早い五月の入梅となりました。梅雨空のつづく中ではありますが、皆さま方にはお健やかに過ごさしめたいと思います。

さて、川向地区の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査が始まりました(図1)。令和五年度には設楽ダムに関連する発掘調査で四遺跡を調査してまいります。その先陣をきって上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の始動です。

調査地は設楽町中央部の南東寄りに位置します。設楽町役場を起点にすれば、役場から北西方向へ約二キロの場所です。遺跡の南には津具地域を源流とする境川(さかがわ)が北東から南西へ流れます。その境川にかかるのが設楽大橋です。設楽町から国道二五七号を北に、稲武方面へ向かわれる際に設楽大橋を利用されることと思います。この設楽大橋から見て北側に遺跡は位置します。工事中の橋脚や樹木により橋から調査地は見えませんが、橋を渡ったり周辺を通行されるときには、遺跡の存在を思い出していただければ幸いです。

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査は令和元(二〇一九)年から続けています。調査成果について、出土した土器の一部を昨年度末三月に開催した成果報告会『新設楽発見伝9』でも展示をさせていただきました。ご覧になった方もいらっしゃるかも知れません。これまでの調査成果のさらに詳しい内容については二・三頁目で解説してまいります。ご拝読をいただければと思います。

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の今年度の調査区は、県道四三二二号小松田



図1 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査の様子

口線のあった道路直下の部分です(標高約四〇〇メートル)。かつての道路部分を調査するため東西方向の延長約五十二メートル、幅が約二・八メートルと、とても細かい調査区となっています。今後、次第に明らかになります調査成果は、あらためて皆さまにご報告いたします。

(鬼頭 剛)

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査

今年で五年目となる上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の発掘調査が始まりました。今年度の調査区は遺跡の中央部、県道四三二号小松田口線にあたる位置となっております(図2)。ここは過去の調査区との繋ぎ目となる区域でもあり、今回の発掘調査で上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の全容が見えてくるかと思われれます。

現在、調査は遺構や遺物のある地層まで掘り下げていき(図3)、遺構の検出作業に取り掛かっています。まず、調査区の東側からバックホウで表土の掘削を進めていきました。表土の下にはかつての耕作土の堆積が確認され、調査区の中央に進むにつれて土石流堆積の層を確認しました。このような、土石流の痕跡は過去の調査区でも度々、確認されています。

調査区の中央付近では戦国期から近世のものと思われる遺構がいくつか見つかりました。過去の調査区で確認されている柵列が今回の調査区でも検出されています。また、天目茶碗や土師皿、金属製品など様々な遺物も出土しております。

調査が進むにつれて過去の調査区との関係性がより明らかになってくるかと思われれます。今後も調査を進めていき、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の全容を皆さまにお伝えできたらと思います(荒木徳人)。

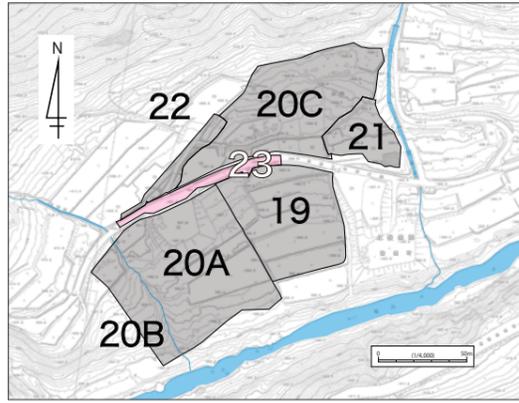


図2 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の調査区位置図



図3 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の表土掘削の様子

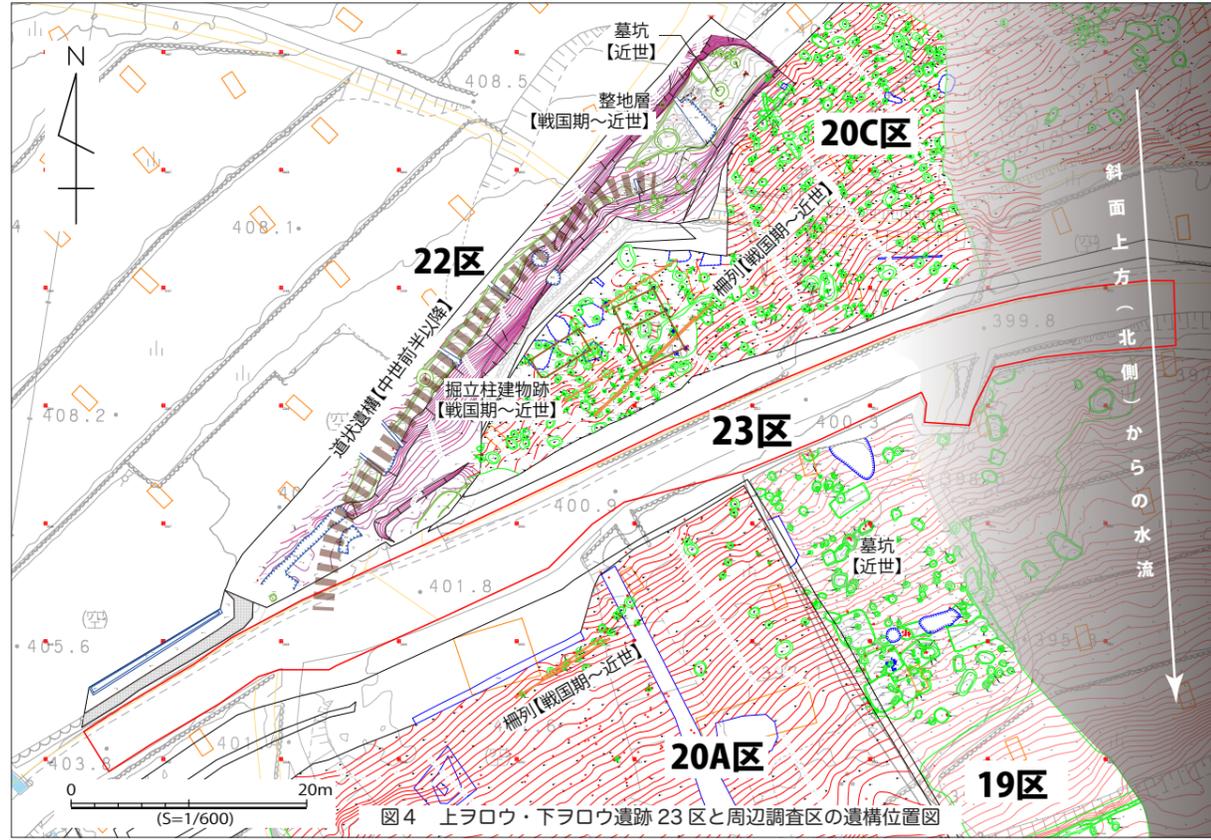


図4 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 23区と周辺調査区の遺構位置図

上ヲロウ・下ヲロウ遺跡では、戦国期～近世の遺構遺物が各調査区で調査されており、今年度の調査で、かつてのヲロウ集落全体の様相がほぼすべて明らかになると期待されます(図4)。考古学的調査としても、当時の一般集落が丸ごと調査される貴重な事例となったと言えます。これまでの調査で、中世以降についてのこのようなことが明らかとなったのか、まとめてみました。

調査区	見つかった遺構	出土遺物
22区	道状遺構、整地層、墓坑、土坑、ピット	山茶碗・小皿・鍋・土師皿・キセル?
21区	集石遺構、土坑、ピット、自然流路	天目茶碗・播鉢・内耳鍋・砥石など
20C区	柵列、土坑、ピット、耕作地、自然流路	陶器(山茶碗・播鉢・天目茶碗・その他戦国期～近世陶器)、土師甕・鍋(伊勢型・内耳)、砥石、銅銭(祥符通宝・洪武通宝・永楽通宝)・鉄滓
20A区	耕作地、柵列・土坑・ピット	戦国期～近世陶器
19区	耕作地、自然流路	広東碗・キセル

このように、これまで調査された遺構は、(一)建物・居住関連、(二)道路・柵列、(三)埋葬遺構(墓)、(四)耕作地、(五)自然流路と、大きく五種類に分けられます。言い換えると、これら五種類の要素が組み合っ、一集落が形成されているということもできます。これを踏まえて、今年度23区は狭い調査区でありながら、これらすべての種類の遺構が展開する可能性があります。

また、今年度の調査では、一ページの図1にあるように、焼けた大きな板石を含む大型の遺構が見つかっています。詳細な内容はこれから明らかになると思いますが、一つの可能性としては、大名倉地区の西地・東地遺跡で調査されたような竪穴状の建物跡かもしれません(図5)。この遺構は、掘り方周囲に柱穴を巡らす方形の遺構でした。西地・東地遺跡で見つかったこの事例では、床付近からは鍛冶を行った際にできた碗形滓や天目茶碗が出土しており、戦国期の鍛冶関連の作業施設であったと推定されます。今回、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡から見ついている焼けた大型の板石は、平らな表面には石の目との異なる方向の傷跡がいくつもあり、鍛冶を行った際に使用された台石(金床石)である可能性が考えられます。中世・戦国期のこのような鍛冶関連の痕跡は、他には万瀬遺跡で確認されています。今後、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡の戦国期・近世集落の特色がさらに明らかになることが期待されます(川添和暁)



図5 大名倉地区 西地・東地遺跡 竪穴状の建物跡①【遺構内からは碗形滓②と天目茶碗③が出土しました。】

設楽町の遺跡で見られる

「完新世」の地層

地質学の時代区分でいうと、私たちはいま完新世という時代を生きています。今からおおよそ一万年前を境に更新世から完新世へと変わります。氷河期という言葉をお聞きになったことがあると思います。更新世は氷河時代とも呼ばれます。言葉のひびきから年中寒かったイメージを持たれがちですが、寒い時期の氷期と温暖な間氷期とが交互に訪れた時代です。いつぼうで、一万年前から始まる完新世は、地球規模で気候が温暖化し、氷河時代に地表を覆っていた氷河が溶けた時代です。溶けた水は海へと運ばれ、海水面が上昇します。それまでの陸地は海になり、海に囲まれた日本列島の誕生となります。

おおよそ一万年前という完新世のはじまりの頃の地層が設楽町でも確認されています。笹平遺跡です(図6)。設楽町役場から国道二五七号を北へ向かうと設楽大橋があります。稲武方面へ行かれる際には橋を渡られることと思います。設楽大橋は境川にかかり、境川とその東の山腹斜面との間にひろがる小松地区の遺跡です。ちなみに、笹平遺跡の位置に対して、境川をはさんだ対岸北側に今年度の調査地の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡がならびます。

笹平遺跡では古くは縄文時代早期後半から平安時代までの遺物や遺構が確認されました。発掘調査の終わりには、大型の重機を使い遺跡の地下に堆積する地層も調べました。直径一メートルを超える大きな石を含む明るい褐色の地層を覆って、標高三八〇メートル前後にウルシやコルタルの色に似た黒味のつよい色調の粘土層が認められました(図7)。放射性炭素年代測定を用いてこの地層が形成された頃の年代を求めたところ、黒味のつよい粘土層が約一万年前の地層さらにその上を覆う黒色の地層が約七千年前の地層であることがわかりました。いっぽんに地層の黒味のつよさは、含まれる有機物量の多さと関係があります。笹平遺跡では、地質時代が更新世から完新世へと移り変わったちようどそのころ温暖な気候に伴って、設楽町の地には地層の黒味のもととなった樹木や草などの植物にひろく覆われるなど環境が変わったことがわかります。

(鬼頭 剛)



図6 笹平遺跡における地層確認のためのトレンチ(南から撮影)



図7 おおよそ1万年前に形成された黒味のつよい粘土層①とそれを覆う黒色土層② 測量用標尺の長さは約2.5m(西から撮影)

設楽発掘通信

No.79

令和5年6月号

編集・発行

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター



〒498-0017 愛知県富田市新須野方802の24

電話 (0567)67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力

株式会社二友組



あいち埋文